

令和3年度 幼児児童生徒の聴力の実態

良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者数

山中 健二・土手 信・川上 綾子・石津 勝基・長島 素子・中坂 聖・鎌田 ルリ子・桑原 美和子

令和3年度、本校に在籍する幼児児童生徒の良聴耳平均聴力の分布、及び人工内耳装用者数を学部及び全校に分けてまとめた。また、近年の全校における人工内耳装用者数の推移についても合わせて報告する。

キー・ワード：良聴耳平均聴力 人工内耳

1 はじめに

近年、新生児聴覚スクリーニングによる聴覚障害の早期発見、デジタル補聴器や人工内耳の普及などにより、聴覚に障害のある幼児児童生徒のきこえに関する状況は日々変化しており、幼児児童生徒の聴力の実態を把握することは重要である。

本校聴覚活用委員会では、在籍する幼児児童生徒の聴力の実態を把握するため、良聴耳平均聴力の分布、及び人工内耳装用者数を毎年まとめている。今年度も各学部及び全校の実態（令和3年12月時点の集計）をまとめ、みられた傾向について報告する。

2 幼児児童生徒の聴力の実態

(1) 全校の聴力分布及び人工内耳装用の状況

全校幼児児童生徒219名における補聴器装用者の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の片耳装用と両耳装用の内訳を Fig. 1 に示した。良聴耳平均聴力の算出の際には4分法を用いた。

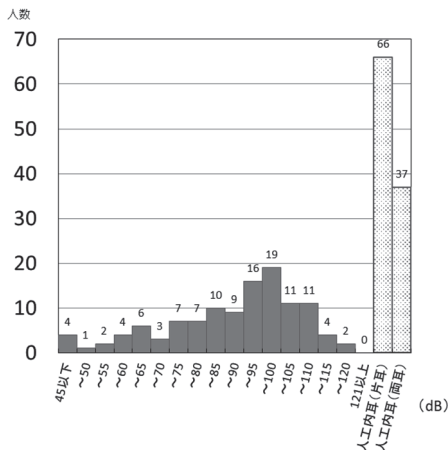


Fig. 1 全校の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用者数

100dB 台の人数が多く、昨年度と同様の傾向であった。人工内耳装用者は103名（全体の47.0%）であり、昨年度と同様、増加していた。

(2) 学部別の聴力分布及び人工内耳装用の状況

① 幼稚部

幼稚部在籍児22名のデータを集計し、Fig. 2 に補聴器装用児12名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用児の片耳装用と両耳装用の内訳を示した。補聴器装用児は、中等度難聴（40~70dB未滿：日本聴覚医学会による分類 以下同様）から重度難聴（90dB以上）まで幅広く分布していた。人工内耳装用児は3歳児3名、4歳児2名、5歳児5名の計10名（学部全体の45.4%）で、そのうち8名（人工内耳装用児の80.0%）が両耳装用であった（Table 1）。平成29年度以来4年ぶりに、補聴器装用児の数が人工内耳装用児の数を上回った。人工内耳装用児の中での、両耳装用児の割合は、昨年度に引き続き増加していた。

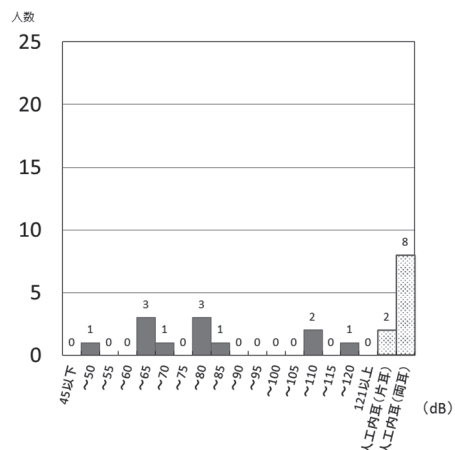


Fig. 2 幼稚部の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用者数

Table 1 幼稚部の状況

	3歳児	4歳児	5歳児	計
在籍児数	8	6	8	22
人工内耳 装用児数	3	2	5	10
補聴器 装用児数	5	4	3	12

② 小学部

小学部在籍児 51 名のデータを集計し、Fig. 3 に補聴器装用児 17 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用児の片耳装用と両耳装用の内訳を示した。補聴器装用児の難聴の程度は、幅広く分布していた。人工内耳装用児は 1 年生 6 名、2 年生 1 名、3 年生 5 名、4 年生 8 名、5 年生 7 名、6 年生 7 名の計 34 名（学部全体の 66.7%）で、そのうち 13 名（人工内耳装用児の 38.2%）が両耳装用であった（Table 2）。在籍児の 3 分の 2 が人工内耳を装用しており、割合としては過去最大であった。学年別に見ても、2 年生以外の全ての学年で人工内耳装用児が過半数を占める状況であった。人工内耳装用児の中での両耳装用児の割合も、昨年度から増加していた。

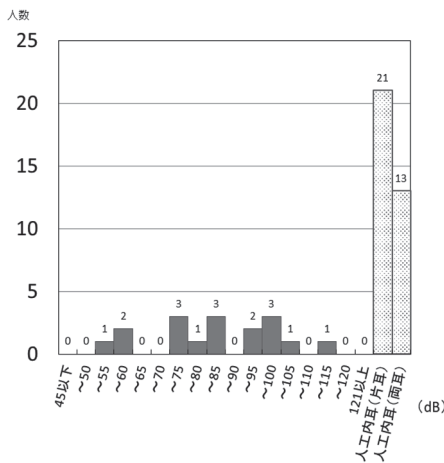


Fig. 3 小学部の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用者数

Table 2 小学部の状況

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
在籍児数	7	4	7	10	11	12	51
人工内耳 装用児数	6	1	5	8	7	7	34
補聴器 装用児数	1	3	2	2	4	5	17

③ 中学部

中学部在籍者 43 名のデータを集計し、Fig. 4 に補聴器装用者 27 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の片耳装用と両耳装用の内訳を示した。補聴器装用者の中では、重度難聴の生徒が過半数（59.3%）を占めた。人工内耳装用者は 1 年生 2 名、2 年生 10 名、3 年生 4 名の計 16 名（学部全体の 37.2%）で、そのうち 9 名（人工内耳装用者の 56.3%）が両耳装用であった（Table 3）。全体の中での人工内耳装用者の割合、及び人工内耳装用者の中での両耳装用の割合、ともに昨年度とほぼ同様であった。

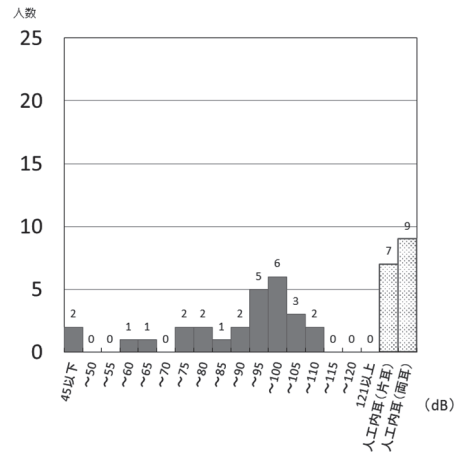


Fig. 4 中学部の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用者数

Table 3 中学部の状況

	1年	2年	3年	計
在籍者数	14	15	14	43
人工内耳 装用者数	2	10	4	16
補聴器 装用者数	12	5	10	27

④ 高等部普通科

高等部普通科在籍者 76 名のデータを集計し、Fig. 5 に補聴器装用者 45 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の片耳装用と両耳装用の内訳を示した。補聴器装用者の中では、重度難聴の生徒が大きい割合（64.5%）を占めた。人工内耳装用者は 1 年生 11 名、2 年生 10 名、3 年生 10 名の計 31 名（学部全体の 40.8%）で、そのうち 6 名（人工内耳装用者の 19.4%）が両耳装用であった（Table 4）。人工内耳装用者の割合は昨年度よりさらに増加した。多くが片耳装用者であるのは、昨年度と同様であった。

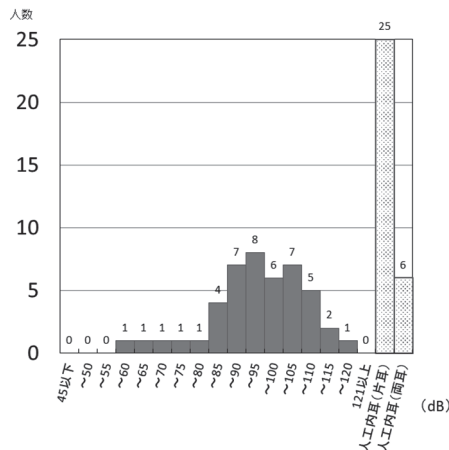


Fig. 5 高等部普通科の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用者数

Table 4 高等部普通科の状況

	1年	2年	3年	計
在籍者数	24	27	25	76
人工内耳装用者数	11	10	10	31
補聴器装用者数	13	17	15	45

⑤ 高等部専攻科

高等部専攻科在籍者 27 名のデータを集計し、Fig. 6 に補聴器装用者 15 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の片耳装用と両耳装用の内訳を示した。補聴器装用者の難聴の程度は、幅広く分布していた。人工内耳装用者は 12 名(学部全体の 44.4%)で、そのうち 1 名(人工内耳装用者の 8.3%)が両耳装用であった (Table 5)。

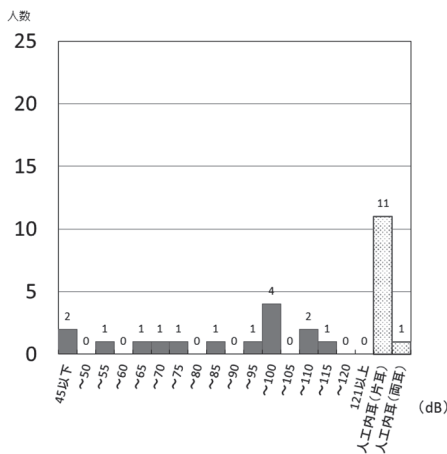


Fig. 6 高等部専攻科の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用者数

Table 5 高等部専攻科の状況

	造形芸術科	ビジネス情報科	歯科技工科	計
在籍者数	3	15	9	27
人工内耳装用者数	0	8	4	12
補聴器装用者数	3	7	5	15

(3) 人工内耳装用者数の推移

全校における人工内耳装用者数について、平成 9 年度から今年度までの推移を Fig. 7 に示した。人工内耳装用者は一貫して増加傾向にある。また、両耳装用をしている者の数も徐々に増加を続けている。

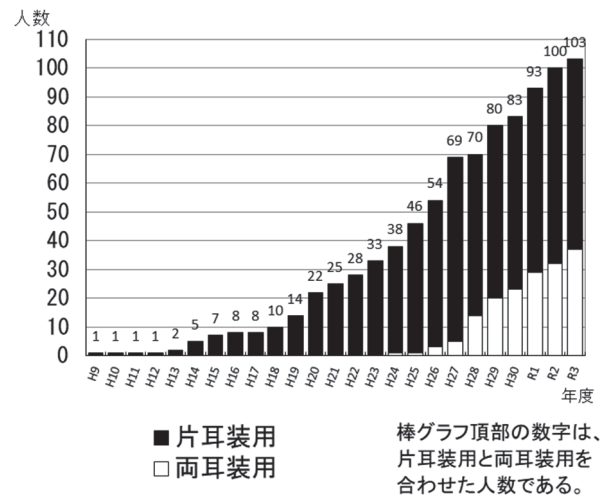


Fig. 7 全校の人工内耳装用者数の推移

3 まとめ

良聴耳平均聴力の分布、及び人工内耳装用者数をまとめた結果、各学部及び全校の幼児児童生徒の聴力の実態や人工内耳装用者数の変化などの傾向をみる事ができました。全校的な人工内耳装用者の割合は、昨年度までに引き続き増加していた。特に小学部の人工内耳装用児の割合の増加が、今年度の変化として目立った。幼児児童生徒のきこえに関する状況は、今後も変化を続けていくと考えられる。一人ひとりのきこえに配慮できるよう、今後も実態の把握に努めていきたい。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

- 日本聴覚医学会（2014）難聴（聴覚障害）の程度分類について．日本聴覚医学会，<https://audiology-japan.jp/cpbin/wordpress/audiology-japan/wpcontent/uploads/2014/12/a1360e77a580a13ce7e259a406858656.pdf>（2021年12月5日閲覧）
- 山中健二・土手信・太田康子・石津勝基・長島素子・中坂聖・石井清一・桑原美和子（2021）令和2年度 幼児児童生徒の聴力の実態及び聴覚活用委員会の取組 良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者数・感染症拡大防止のための取組．筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要，43，106-110.